

水稻栽培期の可動性と水田輪栽に就て

薦田快夫・末澤一男・白井勇

水稻二期作地域を除き、本邦全国的に水稻の播種、挿秧期は旬日以内の移動があるのみで、各地域が殆ど一定して居る観がある。然も此れは栽培適期といふ言葉さえ附して決定的のものと考えられて居る様である。然し、若し所謂適期播種期或は挿秧期といふものは、水稻に対してではなく、其の環境と其の栽培品種に対して存在するものと考へれば、環境と品質との上手な組み合わせにより、此れを広範囲に可動し得られる様に考へられる。故に若し此れを広範囲に可動し得たとするならば、香川県の様な温度で天恵豊かな處に於て、然も其の栽培が極度に集約化した地域に於ての水田高度利用上今後の農業経営に対し新分野を開き得るであらう。

かゝる観点から本試験が実施されたが、全く予備的なものである。然し其の可動性の相当広いことが予想されるに到つたので、詳細な研究は今後にゆずるとして、取り敢へず其の概要を示したものである。供試品種は従来より当地方に一般に栽培されている居る所謂県奨励品種と称するものの代表的なもの（香川35号）及び一般には左程栽培されて居ないが早稲としての代表的なもの（水野錦、農林6号）を比較品種として、東北地方に栽培される本邦としても極早生品種であり、南洋諸国に於て栽培に成功し得た品種等7品種を用ひ試験した。其の結果、今迄殆ど其の実用的栽培は異常出穂現象の為不可能なりとされて居た此れ等7品種も、其の栽培法宜しきを得ると十分に其の品種本来の収量を示し得ることが明となった。然も天恵による生育日数の短縮が行われて日当反収量が著しく高く、此れ等品種の巧な取り入れによつて、水稻栽培期が著しく可動し得ることが明瞭である。即ち早春より初夏にわたつて、此れ等品種を栽培する場合、其の播種期、挿秧期の遅れるに従ひ、一般に考へられる様に各品種を通じて一律に其の生育日数を短縮して来る。而して其れがある限度に達する時（6月30日播種、7月13日挿秧）生育日数が最短となり、その後は或期間は生育日数の短縮がなくて多少の延長を示しつゝある期間継続する。此れに反し当地方に従来より一般に栽培された品種はその後にも生育日数の短縮が継続されて最短に達すると、其れよりの晩播晩植に於ては著しく生育日数は延長して成熟不能におち入る状態となる。故にかゝる時期の挿秧には仮植苗等を使用せねばならぬ必要性のある事を裏書きして居る様である。

次に日当種実収量、即ち播種より出穂迄の生育日数の割合に於ける種実収量は、此れ等極早生品種は極めて多く、土地利用の観点から農法としては有利であることが明である。本試験に於ては従来普通栽培に於て多くとも日当反玄米収量は2-3升であるに対して、此れ等の7品種中には4升以上に達するものさえある。

以上の様に水稻の栽培期が可動し得る事になれば、水田の輪栽様式上に於て各種の事が考へ得られる。だが尚現下の農法上から見ても、香川県の様な挿秧期に降雨なく、毎年早魃の為め全く挿秧不能になり、常習早魃田とさえ称せられる地帯が相当あるが、斯る地帯に於ても7月下旬には大体に於て降雨ある為め

7 月末期に挿秧しても上記成績の様な収量を収め得る。故に麦収穫後、尚適当な一作物を収穫して後ちに降雨を待つて 7 月末となり、水稻栽培に移り得る。其の結果、水田早期早魃問題は完全に解消し得られることにならう。又当地方に一般に栽培される水田煙草作に於て、其の煙草跡作水稻は仮植、其の他の苦勞をしつゝ尚年により成熟を完ふし得ない危険栽培が行われて居るが、本試験結果よりすれば斯る水稻作は其の品種選択の宜しきを得れば、此れは極めて安定作となり得るであらう。又現下の農法とは多少趣を異にして早春播種して 8 月中旬頃迄に収穫し得るとせば、9 月以後麦の播種、或は移植迄には完全に圃場が空間となる。故に此の期間に於て、飼料作物の一作、或は換金作物の一作は自由に挿入可能であらう。今其の一例として昭和 23 年の本試験の早期普通栽培の水稻刈取後、十分土地耕起、其の他の作業期間を考慮して 2 週間以上後れた 9 月 2 日に飼料及青刈肥料用として蚕豆を栽培し、11 月末日に収穫した収量は次の様である。故に其の半分を家畜の飼料、其の半分を肥料として使用するとせば、水田を高度利用し、尚且つ地力を増進し得られる。

品 種 名	一株最高 草 丈	一株平均 草 数	反 當 草 葉 重	反當根重	備 考
早 生 蠶 豆	81.9	15.7	1042.9	287.0	反當株数は 約 6.500 株
長 莢 蠶 豆	71.0	19.0	915.7	298.9	草葉重は 抜取直後の新鮮重

本例は蚕豆の一例であるが、此の蚕豆は 1 月上旬に地上部を刈取ったものは目下（3 月中旬）其の株よりの新萌芽により 10 月下旬に播付けたものに比し、より旺盛な株張りを示し、草丈 30 糎餘あり種実の収穫も一般栽培のものより多収の様である。

此處に示したのは蚕豆の例であるが、蚕豆或は其の他の地力増進と飼料を兼用し得る作物を栽培せば、乳牛の導入も容易に、所謂水田酪農の基礎を樹立し得るのではあるまいか。尚冬期間の作物に就ては別途に之れを研究する予定である。

以上の様に水稻の栽培期の可動性が、温暖地方に於いては水稻を極めて安全なものとすると同時に、今後の農法改善、否農業改革に極めて大きい貢献をなし得る様に予想される。尚此れに 2・4・D 殺草剤の出現が、益々此れに曙光を與へるものであつて、今後水稻品種の感温、或は感光性といった様な其の生理生態的特性を十分考慮して、廣く品種を選択し其の應用宜しきを得るなれば、極めて安定性ある水田輪栽形態を樹立し得るであらう。